

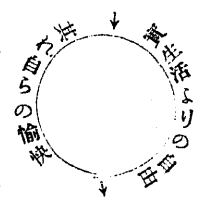
兒童の遊戯に就て

(日本兒童研究會第一回講話會に於て)

文學士 倉橋惣三氏述

遊戯の問題は實に廣い問題でありまして、生物學的、心理學的、教育學的、美學的乃至社會的と云ふやうに、諸方面の研究に涉つて居るのであります。それで其の各方面の見方を一々論じて居りますれば大層大きい事になり従つて委しいことなるのであります。併し餘り廣過ぎて、全體の概括と云ふものが却つて分りにくくなることがあります。そこで、此の廣い問題を特に兒童の遊戯と云ふことを中心にして一とまじめにして一目の下にその大體の要點を了解する事は出來まいかと思つたのであります。即ち茲に述べます事は別に新らしい研究でも何でもないのであります。從來種々議論されてをりまする兒童遊戯論中の主要なる問題を一括して試みに簡單なる圖式に作つて見たのであります。不完全の點は示教によりてだん／＼に改めてゆきたいと思ひます。

過剰勢力
精神活動
本能
過去生活の反復



諸想模
戲曲本
滑稽感
好自己存本
智阿莧集本
社智阿莧集本
會
性力ム能能能
心能傲像覺

實生活

年性氣健時外教
別質康代圍育
齡

この圖の中心は云ふまでもなく兒童の遊戯であります。その上にあります四ツの項は、兒童の遊戯

が何故生ずるかといふ所謂遊戯の理論の中で重なる物をあげたのであります。そしてその下に矢の印をかきましたのは、之れ等の諸理由がもとになつて兒童の遊戯が出来ること云ふ事を示した積りでありませぬ。處が、かゝる理由に依つて遊戯は生じますが、併し實際上その遊戯の内容なり形式なりを規定するものが無ければなりません。其の規定條件の中、兒童遊戯の心理的内容となる物が右の方の諸項、尙之れを實際上に規定し變化してゆく影響條件が左の諸項なのであります。而して此の三大條件に依つて實際兒童に行なはるゝ種々の遊戯といふものには、圓の兩側に付記してあります通り、二大特性があつて、しかも尙且此の遊戯が注ぎ込む處は遊戯ならざる實生活であると云ふので下の矢がそれを示して居る積なのであります。以下簡略に各項の説明をいたします。

遊戯の理論

第一 過剩勢力、兒童は何故遊ぶかとの疑問に對して、古來種々の説があります。歴史的に辿つて見ますと、先づ第一に擧げなければなら

らないのがシルレルの考へであります。素より學說と云ふ程まよつた記述があるのであります。然るが、之が後に過剩勢力説として説かれます考へるものなして居るのであります。シルレルの有名なる『美育に關して』と題する、書翰集中の第廿七番目の書翰の一節に『動物は缺乏がその活動力の動因になつて居る場合には働き、其の動因が力の充溢である時、即ち過剩の生活力が動物をして自ら活動せざるを得ざらしむる場合には遊びとなるのである』と云ふて居ります。尙又之れを説明して例へば獅子が荒野に咆哮し、小蟲が日光の方に群れ、小鳥が梢に囀るの類、皆生活上の缺乏がもとになつて其の慾求を充たす爲にばかり爲して居るのではない、左様いふ場合ならばそれは彼等の實生活上の仕事なのであるが、そういふ眞面目な目的があるではなし只其の充溢せる餘力を漏らし自ら樂む爲に斯かる事をし即ち遊ぶのであると云つて居ります。然してその上に尙此論を擯にして植物に不用の小枝や無駄花や餘計な果實があるのもやはり彼等の遊戯である

と迂言つて居るのであります。

其の次に此の詩人的考へを心理學的に述べてをるのがスペンサーであります。即ち彼はその『心理學原論』の第二卷の第九章の審美感情論の中で之れと全く同じ考へを述べて居ります。『下等なる動物は自己保存の爲めにその全力を費し盡すのであるが次第に高等なる動物になるに従つてその時間と勢力とを生活の直接的必要の準備の爲にのみ用ひつくす事はない』そこでその餘剰を以て遊戯が起ると云ふのであります。スペンサーが自分は此の自分の考へと似た考へを嘗つて獨逸の何人か書いて居るのを、をぼろげに覺えて居ると云ふて居ますのは即ち疑もなくシルレルの事を指して居るのであります。尤もスペンサーの説は必ずしもシルレルの考へを繼承したと云ふのではなく、又其の考への上でも別に摸倣と云ふ一要素を加へ來つて居る所など（後に説く）の差違は存するのでありますが大體に於て同一系統に屬すべきものであります。次にやはり同一系統の説で明かに過剰勢力説を執つて居るのは伊太利のコロッアであり

ます。彼れも亦過剰勢力一點張りでは無論ないのであります。寧ろ第二の精神活動説の代表者として見るべきものであります。然し其の著『兒童の遊戯の心理及教育の中の『過剰なき所に遊戯なし』の一章の如きは明かに過剰力の考へを述べて居るのであります。所で段々と此の諸家の考へを研究して見ますると最も著しく氣のつく事は、同じ過剰勢力説ではあるが、其の間にたしかに一つの變遷のあることとあります。即一口に云ひますればその過剰の勢力と云ふ意味が初めは主として運動的な筋力的の意味が籠つて居つたのが後には心理的な筋力的の意味を多く加へて來て居る事でありあります。即シルレルが單に『過冗の生活』と云ふ様な漠然たる語を以て言つて居つた事が、スペンサーでは『神經の過剰力』と云ふ稍細かい説明になつて來てゐる上に『摸倣』と云ふ純心理的要素を加へ、更にコロッアに至つては『心的能力』と云ふ事が主なる要件になつて來て居ります。そこで此の變遷を少しく批評して見ますと、初めの説が單に筋力的運動的の勢力のみを考へて居たのは

明かに誤りであつて、其の爲めに植物の無駄花までなぞを遊戯と見るやうな極端な比論にも陥つたのであります。併し遊戯の原因の中から此の動的な過剩勢力を全々除くことは出来ません、其の缺點を補ふに心的の活動を以てする必要があると共に矢張り此のもの考へをも確かに存して居らなければならぬのであります。即明かに此方面いづれも過剩を考へなければならぬのであります。『精神活動説』を執りながら尙ほ『過剩なしに遊戯なし』と云てゐるコロツアの態度は公平であると思ひます。

第二 諸精神活動　そこで此の過剩勢力の次に擧ぐべき事は諸精神活動であります。即ち既に述べました如く一家の意見として此の説を將に主張して居りますのはコロツアでありまして、其の著書には極く下等の生物に遊戯のないのは彼等の精神活動が無い若くは乏しいからである、精神生活の發達と共に遊戯の数が多くなつてゆくのであると云ふ事を動物界の實例について述べ殊に人類の遊戯は主としてその心的要素に基くものなる事を主

張して以下その所謂『心的要素』と遊戯との個々の關係を一一説明して居るのであります。而して此の事は我々尋常兒童のみ見て居ります時は餘りに當然の事で反つて氣がつかぬのであります。併し所謂遲性兒、白痴兒等の場合に就て見ますれば、彼等に遊戯がいかに乏しいか、少くもその種類に於ていかに乏しいか、別るのであります。之れ即ち一方には彼等の健康状態の缺陷の爲めに運動的方面の勢力の過剩に乏しい爲でもありませうが又一方にその心的要素の缺陷に因ることは明かなのであります。而して後に説きまする遊戯の心理的内容と云ふのが即此一つ一つにあたるのでありますから詳しくはその説明の時に譲りますが、其の諸精神活動中で殊に何が最も遊戯の根本的要素をなして居るか云ふ事を昔から色々人が考へまして、多くは『模倣を以て説明して居るのであります。而して其の代表者として主要なのは、前述のスペンサー及び新らしく、ヴントであります。即ち單に勢力の過剩と云ふ丈だけでは遊戯の諸形式が分れてゆく理由の説明に困難な

所から、そこへ『模倣』と云ふ作用をとり入れたのであります。ヴントは元來兒童の遊戯を其の想像作用の産物として見てゆくのではありませんが、矢張り『模倣』を以てその形式の分れ方を説明して居ります。『人間及動物の心理に關する講義』の中では『遊戯は實際生活の動作を模倣』したものであると云ひ、近著『民族心理學』の中でも一層詳しく此の事をのべて兒童の遊戯を其の形式から傳承的遊戯、自製的遊戯の二種に分けて而して其の孰れも模倣によらないものはないと云つてゐます。即ち傳承的の遊戯では往來の遊戯が手本となり、自製的の遊戯では現在の實生活現象が手本になつて居るの差があるだけだと云ふ事でありま

す、處で此の模倣説に反對してあらはれたのがグロースの本能説であります。

第三、本能、クローヌスは成る程遊戯中の多數が模倣によつて居る事は事實である、然し動物及び人間の遊戯の多くの中には全く模倣でないものが澤山ある、遊戯は模倣よりも一層自發的なものである、と云ふ考へから『動物の遊戯』『人間の遊戯』

の二大著を書いたのであります。此の二者の中、遊戯の理論に就ての氏の考へを窺ふには殊に前者の方が便利であります、其の中に段々と昔からの説を批評して、一切の遊戯は各種の本能に基いて生ずるのである、即其の本能が實生活上に現る、前に先づ遊戯としてあらはれるのであると云ふ結論をして茲に本能説をたてゝをるのであります。即ちグロースの考へではウーフェルがコロツアの譯書の序文に書いてゐますやうに動物及兒童の遊戯は Nachahmung, Vorahmung, Nachübung (後カラ) なく Vorahmung, Vorübung (前カラ) であると云ひたいのであります。尙詳言すれば、遊戯の形式は手本によつてのみままるのではなく、各本能がその形式を以つてあらはれるのだと云ふ事であり、ますそれで人間の遊戯でも衝動に基いて遊戯の分類をしてゐます。處か此考へは從來の諸説に比して大に生物學的新見解を加へ來て頗る傾聴すべき物であり大に貴重すべきものであります。が、只惜いかな一つの缺點はグロースが餘り本能を主張しました結果云はゞ自然の勢として、凡ての遊

戲は皆其の生物の將來の實生活の準備乃至練習であること云ふ事を餘り強く主張した事でありませう。蓋し事實上大抵の遊戯は皆何等かの意味（若くは關係）に於て將來の實生活の準備となつて居る事は疑ふべくもない事であつて此の點が明かにされたる爲めに遊戯の價値と云ふものが大に著しく認めらるゝやうになつた事は之亦本能説の効でありませうが併し理論的に云へばそれはたい遊戯の結果たるに止まりまして、何も遊戯を自ら此の結果を豫期し若くは豫想して居る譯ではないのであります。即ち後から見てもその結果を見る事は出来ませんが其の故を以て直ちに遊戯そのものに有目的の意味を附する事は論を誤つて居るものであります。パウドキンが『動物の遊戯の英譯の序文中で、之れは餘り實際説だと評してゐますのは尤もの事でありませう。（此點は尙後に説く）そこで此の餘りに有目的に解せんとする考へに對してスタンレーホールの説が出て居るのであります。

第四 過去生活の反復、スタンレーホールは其の大著『青年期』の中でグロースの説に反對して、

遊戯は決して將來の有用の爲にのみ存するものではない、兒童の遊戯を廣く觀察すれば全く無用のものも少なくないこと云つて次の如き定義を與へてをります『遊戯は過去生活の運動的習慣及び心的生活を現在にまで殘留してあらはれて來る者である。而してその中には恰も彼の身體上の不用器官の如く不用活動である者がある』。即ち遊戯の源因を遠く進化論上の過去に置いた事はグロースと同じてありますが本能即有要と云ふ實用的見方から離れて遊戯の中に多くの不有用なる隔世遺傳（尙後に説く）に基づくものゝあることを説いたところ（尙後に説く）のであります。

扱て以上諸説（此の他にも多少の異説あれども畧す）を通過して見まするに、學説の歴史的發達上には互にその新着眼點を強く主張せんとするの結果、おのづからその以前の説を拒むるといふ風の傾向があらはれ易いのであります。併し實際兒童の間に行なはれてゐる所の殆んど無限なる多様な遊戯の種類を觀察します時は、必ずしも之れを説明するに一個の説を以てしなればならない

と云ふことはありません、又事實上いろいろの原因が複雑に交つて居ることを見るのであります。即ち歴史的にだん／＼顯はれて來ました右四つの説を總て存して、而して兒童の遊戯は之等各様の原因の總て、若くは特に孰れかに基くと云ふ事にかんがへるのが都合がよいと思ふのであります。依つて此の四つを一つに括つて兒童の遊戯の原因としたのであります。(つゞく)

○チレ毛の治療法

縮毛症の原因は未だ不明である、近來一種の黴菌が毛根に附着した爲めに起ると云ふ説もあるが、多くは先天的で、また營養神經の障害から來るものも多し此等は食事に注意して營養を良くするの一つの療法である、縮れ毛は輕いのや一時性のものであつたら風呂に入つた時毛を解き延した上を手拭で縛り蒸しながら直すのも効目があるそれから少し手重いのであつたら漢藥屋から甘草根の刻んだのを五匆程買つて來てそれに水五合を加へて煎じ、詰めた處でまだ熱い内に普通の癖直しの様にして用ゐると宜しい

子守の心得

樂天子

- 一、子守の役目
第一、子守の役目最も重い役目であります。
- 二、子守は、父母、主人其の他目上の人に對しては、其の命令に従ひ教師の教へは確く守つて一心に己が役目を勉めなくてはなりません。
- 三、子守の心の善悪は、すぐに子供の心にうつるものでありますから、子守は常に正しい心でなくてはなりません。
- 四、子供は又子守の行を真似るものでありますから、子守は常に禮儀を重んじ言葉遣立居ふるまひにも氣をつけ子供のよき手本とならなくてはなりません。
- 五、子供は親切に取りあつかひ、猥りに叱つてはなりません、子供は愛されるれば愛される、程その人になつくものです、然し無暗に子供の機嫌を